



明治大学司書・司書教諭課程の歩み

阪 田 蓉 子

はじめに

『司書・司書教諭課程年報』（以後『年報』と略します）No1の古屋野素材先生（情報コミュニケーション学部）の記事によると司書・司書教諭課程の設置は、明治大学にとって「悲願であった」と記されています。殊に図書館では数10年前にもその計画があったと後日伺いました。

2009年度には課程設置10周年を迎えますので、この間の経過を記しておきたいと思います。2000年度開設に至るまで

2000年の設置が実現した背景には三部署における念願とこれを実現すべく働かれた教職員の方々のご努力が実ったものと受けとめています。悲願が実るに際しての契機のひとつとして、文学部の改革が挙げられます。学部改革案が検討されていた時期で、既存の資格に加えて司書資格の付与という案が浮上しました。

同時に学校図書館法の改正の影響もありました。2003年度からの小・中・高等学校における司書教諭の設置が決まり、教職課程としても司書教諭課程設置の機運が高まったようです。

加えて、図書館の従来からの願いがあり、この三点があいまって集約され、強力な力となり実現に至ったと言えます。

私自身について言えば、古くからの友人である別府昭郎先生（教職課程）と古屋野素材先生（当時は教職課程）から司書・司書教諭課程の設置に関してご相談を受けているうちに、明治大学で働かせていただけるといいなあとの漠然とした思いが次第に現実味を帯びることになったといえましょうか、とても幸運なことでした。

後に記しますように、設置の準備は赴任前にしていただいたので、文部省（当時）への申請、そのための書類作成などの仕事はお任せして、

兼任講師への依頼などについてご相談にのる程度でした。ですから直接、間接に関わってくださった方々のご苦労は大変なものであったということも後で知ったわけです。

申請の前、学内のコンセンサスを得るために、当時的一部教務部長であり現学長の納谷廣美先生、二部教務部長の別府先生、文学部の教務主任の玉井崇夫先生、文学部長増田秀男先生、そして元図書館長の故後藤総一郎先生（政治経済学部、元理事）、図書館長を引き継がれた三枝一雄先生（法学部教授）など多くの先生方がご尽力くださいました。

実現にあたり、学内全体でのリーダーシップをとっていただいた納谷現学長は、図書館に対するご理解が深く、常に後ろ盾としてご支援くださっています。

図書館内部では、構想の具体化以前から関わってくださったのが伊藤裕元部長、橋本千良元部長、大野友和氏（当時庶務課長、現大学振興部長）そして飯澤文夫氏（当時整理課長、現学術・社会連携部長）でした。最終的な実現の段階で、特にご尽力いただいたのが先の後藤元館長と大野氏であったとのことです。

大野氏は確か1999年度の日本図書館協会全国大会における教育部会で「明治大学も来年度から課程新設云々」と自己紹介をしてくださいました。その頃既に水面下（？）で、私の赴任のお話も進みつつあり、私としてはどのようにご挨拶をしたものやら…と、ちょっと返答に窮したのです。

課程申請にあたっては、古屋野先生が教員として文部省との交渉並びに兼任講師との時間割り調整などのお役目を引受けてくださり、実務面では当時の教職等課程の事務長であった三島

昭雄氏を柱に白石敏道氏が精力的に仕事を進めてくださったとのことです。

司書課程の文部省への届け出には2名の専任教員が必要です。そこで明治大学では、他大学の例に倣い、社会教育主事課程の小林繁先生（「生涯学習概論」を現在もご担当）に司書課程のご担当もいただくことで申請をしました。

そのお役目もあって、文学部教授会で小林先生は司書・司書教諭課程の兼任講師10数名の方の業績等のご紹介をしてくださいました。「聞く方も大変だったようだけど、僕はもっと大変だったよ」と後日笑いながらおっしゃっていました。

開設

いよいよ2000年4月からスタートしましたが、実は就任以前の3月にガイダンスがあり、辞令交付前にもぐりで（？）生田キャンパスまで古屋野先生のご案内で出かけました。

なお、司書・司書教諭課程が参加し、五課程となったため、それまで教職等課程と呼ばれていた名称が資格課程となったのは教職以外の我々にとっては「少々」喜ばしいことでした。

司書課程は初年度は講義のみで開始し、2001年から演習科目を実施しました。講義科目を修了しないと演習受講ができないため、実質的な措置でした。司書課程は二部（当時）の学生も含め、合計282名によるスタートで、司書教諭課程の方は3年次開始でしたが、こちらは4年の受講生が多く、合計186名で始まりました。

図書館のご協力

明治大学の図書館は大学令における大学開学以来の伝統ある図書館であり、第二次大戦前から図書館の方々も専門職として私立大学図書館協会などで要職につかれ、指導的立場におられました。その歴史からみても司書課程が設置されていないことを嘆く方も多かったようです。

現在も実力ある図書館員を擁しておられる図書館の方々に科目のご担当をいただきたいと考え、兼任講師としての派遣をお願いしています。

学生にとっても図書館現場の方々の指導が必要であり、まして自身の大学の専門職の方とのコミュニケーションは司書志望の学生にとって

有力な武器となります。

図書館情報学関連資料の収集など、司書・司書教諭課程は、図書館との協力関係なしには円滑な運営が成り立ちません。そういった様々な理由により開設当初から今日まで大野氏と飯澤氏には課程の兼任講師そして現事務長の菊地亮一氏には司書講習の講師をお願いしています。

図書館の方といえば、資格課程グループの現事務長高橋美子氏にも図書館におられた時代には兼任講師としてお手伝いをいただきました。司書の専門職としての経験があり、ご理解ある方が事務長であることはとても心強いことです。

後のことですが、図書館は平成19年度「特色ある大学教育支援プログラム」（略称:特色GP）に採択されました。その一環として開催されたシンポジウムにおいて、パネリストのひとりとして意見を述べる機会を与えられました。

今後ますますいろいろな機会に、明治大学を図書館の世界から支える両輪として相互に協力関係を維持していくことを切に願っています。

記念シンポジウム

2000年5月20日に、かねてより準備していただいていた明治大学司書・司書教諭課程開設記念講演会が開かれました。

司会を小林先生が担当してくださり、増田文学部長（当時）のご挨拶で始まりました。基調講演は当時慶應義塾大学文学部教授で、日本図書館協会教育部会長であった高山正也先生（現国立公文書館理事）でした。「現代の図書館と図書館員養成の課題」と題して、今後の図書館員養成に関する明治大学への提言も含め、密度の高いご講演をいただきました。

シンポジウムは「21世紀の図書館に期待するー明治大学はどんな司書・司書教諭を輩出するのかー」とのテーマで、三枝元図書館長、山家篤夫氏（当時東京都立日比谷図書館司書主任）および坂口泰通氏（明治大学付属明治高等学校教諭）による鼎談でした。阪田がコーディネーターの役割を務めました。

このシンポジウムは課程の受講生に参加を促したこともあり盛況でした。このような会を

大々的に実施されたことに、私はあらためて明治大学の力を実感したのでした。

司書・司書教諭課程年報

『年報』No1には、司書課程および司書教諭課程の二人の学生のレポートを掲載しました。図書館情報学関係の学術雑誌は既に学会誌など数点あるので、学術論文のみではなく、他の受講生にとって参考になるようなレポート等も掲載しようと考えた次第です。

後には受講生が掲載されることを目的に、レポート作成に力を注いだと聞き、思わぬ波及効果があったと実感しました。また、レポートを課する際には見本として過去の『年報』を渡していますが、他の論文や記事などにも目を通す機会になるので有用です。卒業後も欲しいと言ってくる学生もいて縦のつながりもできてきました。

『年報』には巻頭言代わりに毎年、その年の記録を残すようにしました。このような公式の記録では裏の話がみえない、ということにもなるのですが少なくとも、いつ、どんなことがあったか、誰が関わっていたかということを知る手だてになるだろうと考えたからです。

2001年度

図書館実習

現在、司書課程では実習を必修科目としていません。実習の必修あるいは選択については、図書館の世界でも賛否両論あります。理念的には、資格に不可欠のものだと考えています。が、実習先図書館の確保や実習生の指導などいくつかの問題があり、現在は選択科目として図書館特論で実習希望者に機会を提供しています。

明治大学の図書館では司書課程設置以前から他大学の実習生を受け入れてこられ、受け入れ先としての蓄積があるので、毎年、図書館の方に「実習に行く際の心構え」ということでお話いただいています。諸注意に加えて事務室内や貴重室の案内もしていただき学生にも好評です。

ほかにも元立川市立図書館におられた齋藤誠一先生（千葉経済短期大学准教授）などに「心構え」を伺う機会を設けています。

公立図書館、大学図書館に加えて松竹大谷図

書館やかつては専門職のおられた都立音楽資料室（現在は実習不可能）などの専門図書館も実習生を、受け入れてくださっています。

『年報』には実習先の指導者の方にも「実習生を迎えて」ということで執筆をお願いしています。

現場の方々はとてもご多忙なのですが、合間を縫ってご執筆いただけると実習生のみならず、読者である他の学生にとっても糧となり、また実習を経験してみたいという意欲をおこすことにもなるのでとても有り難く思っています。

特別講義

この年度から特別講義を外部の方々をお願いしています。『年報』No3には特別講義を受講した学生のコメントを掲載し、間接的に講義の内容や感想が伝わるようにしました。現在は講義の要約も掲載しています。

図書館の方や図書館情報学の専門の先生方に限らず、シャンティ国際ボランティア協会の方に難民キャンプやかつて戦場だった国での図書館づくりについてのお話も伺ったりしています。

後（2005年度）のことになりますが、明治大学の理工学部の卒業生（1964年卒）で図書館建築の世界では著名な藤原孝一氏に来ていただくことができたのも受講生にとって大きな刺激となりました。

2002年度

司書課程は2002年度で完成年度を迎え、すべての司書就職希望者が専任の職を得たわけではありませんが、公立図書館や大学図書館に就職する卒業生もできました。

貴重書展示 図書館ギャラリー

この年度から図書館のギャラリーでの貴重書展示が始まりました。それまでは「図書および図書館史」の授業の教室に主要なものを携えて来ていただいたのですが、受講生数も多く、時間も限られ、図書館の方々の手間も計り知れないなどの理由からギャラリー展示に切り替えていただきました。当初は「図書の文化史－粘土板からインキュナブラまで－」というテーマでしたが、今では19世紀まで扱いさらに和書も加わりました。

展示により、受講生だけではなく学内の方を

はじめ、外部の方の目に触れる機会ともなりました。校友の方から会合の際にご覧になり、記事を書いたからとお送りいただいたこともあり、長期にわたる公開は難しいですが、貴重な資料を多くの人にお見せすることも所蔵する大学図書館の使命の一つとして実施していたに感謝しております。

さらには系統だった蔵書構築を目指し、高額な資料でも必要と認めれば購入するなど、大学全体で配慮していただいていることにも明治大学の後世に向けての意欲を感じています。

兼任講師

学生にとって先輩の先生がおられることは心強いことです。文学部史学地理学科の卒業生で、長年「調べ学習」を実践し、研究しておられる米谷茂則先生に司書教諭科目を担当していただくことになりました。米谷先生はその後東京学芸大学でご研究を重ね、博士号を取得されたのですが、研究熱心な先輩であることも受講生にとって、大いに刺激になっています。

兼任講師には無論学識や理論構築力が欠かせません。が、これに加えて司書課程では図書館そして司書教諭課程では教職のご経験がある方を重視して、講師のお願いをしました。司書や司書教諭養成の場としては、現場の経験をふまえて教えてくださることが受講生にとって肝要です。受講生もこちらのねらいを受け止め、現場に対する関心を深めています。

実験助手補

課程開設当初から実験助手補として課程室の運営に関わっておられた長谷川（旧姓：田代）徳子さんが退職されることになりました。卒業生で社会経験のある方で、司書の資格を取得しながらの勤務でした。

長谷川さんのおかげで、明治大学にまだ慣れていなかった私もいろいろと情報を得ることができ、貴重な存在のおひとりでした。

2003年度

嘱託職員

長谷川さんの後任として来られた佐藤繭子さんは、実験助手補の制度が廃止されていたので、

身分は嘱託職員ということになりました。文学研究科の博士課程修了の方で、2007年度の任期満了まで長谷川さん同様、先輩として大きな力を発揮してくださいました。

2004年度

司書課程室

この年、ガラス張りの横長の建物に（公募の結果、アカデミーコモンという名称になりました）、課程室は終の棲家(?)を得ました。

課程の開設時は、大学院の建物だった13号館に部屋がありました。3階でしたが地下室のように暗く、天井には空調用の配管などが向きだしになっていました。ここから11号館の1階に移りました。11号館は直接部屋へ行くには遠周りになるのでいつも資格課程の事務室を通りぬけていました。その苦労(?)が報われ、8階の明るい見晴らしのよい場所に移ることができたのです。

ディスカバー図書館

4月に「ディスカバー図書館2004－図書館をもっと身近に暮らしの中に」というテーマで文部科学省と日本図書館協会共催のイベントが本学のアカデミーコモンで開催されました。イベントは7月4日にNHK教育テレビも放映しています。

このプログラムのひとつにキャッチ・コピーを作成するというものがありました。このアイディアを借りて「図書館サービス論」の授業で、後には司書講習の同じ科目で、受講生に作成するという課題を与えました。その後毎年『年報』に作品を掲載しています。

勉強会

某旧国立大学の図書館に就職した、H先輩にお願いして月に一度程度、勉強会を開いて大学図書館の実務などについて知る機会を設けています。この先輩の友人のTさんも明治とは直接関わりがないにもかかわらず、専門職養成に関心をもち、協力をしてくださっています。

司書課程は公共図書館の司書養成が主目的なので、大学図書館の現状などを知る良い機会となっています。

そのせいもあるのでしょうか公共図書館や学校図書館のほか、独立行政法人大学の図書館に

就職する人たちが輩出しています。

当初は3～4年生が中心でしたが、今では1年生から参加している学生もいて、頼もしい存在になっています。先輩から後輩への指導は明治大学の誇る伝統のひとつと言えるでしょう。

LIPERへの協力

日本図書館情報学会の図書館情報学教育班による初学者調査に司書課程受講生が協力しました。明治大学のデータを『年報』No.5に掲載しています。その後も引き続き協力しています。受講生も興味をもって参加している様子です。

2005年度

増員

課程も6年目となり、前年度、ようやく認められた図書館情報学の専任教員の採用がこの年に実現しました。齋藤泰則先生が加わってくださり、教育面における充実など新しい取り組みや展開が可能となりました。資格課程及び教養課程や文学部のご支援のもとに実現したことに深く感謝しています。

受講年次変更

二人体制になったこともあり、早速改善に着手し、受講開始年次を早め、1年次から可能にしました。2年次からの開始ですと演習が4年次となり、就職活動や教育実習と重なって、問題があり、受講生と教師の双方から改善が望まれていました。

司書講習

この年、リバティ・アカデミーで司書講習を開始しました。2003年度にリバティ・アカデミーから講座など手伝えることがあれば記入してくださいとの依頼用紙が各教員に届き、司書講習開催の可能性について記したところ、飯澤氏がリバティ・アカデミーの担当者だったこともあり、強力に推進してくださいました。が、実施は1年延びて、2005年度から開始しました。

この講習開催は図書館情報学の専門家の増員が認められたことの一因であったろうと受け止めています。そして実施に際しては新任の齋藤先生が大きな力を発揮してくださいました。

司書講習での司書養成には短期間での速成と

いう問題もありますが、資格をもっていない現職者教育という面が未だ残っていることと受講者に図書館の存在やそのサービスを知り、図書館を外から支援する人になってもらいたい、図書館を広報する機会としたいなど様々な理由から講習開設に踏み切りました。

初年度から応募者は他の講習開催大学よりも多く、およそ3～4倍の方が毎年受講を希望しておられます。書類と作文による選考により100名受け入れています。他大学の応募減少に比べ、明治大学は知名度と最寄り駅からの近さや古書店街など地の利のせいか、大変期待されていますので、その期待に応えていかなばと肝に銘じています。

杉並区への協力

明治大学と杉並区との協力事業の一端として旧角川源義邸の蔵書整理のお手伝いをしました。希望者を募り、12月末から中心になる担当者の相談開始そして3月にかけて、杉並区の施設まで出かけ整理作業を実施しました。中心になってくれたのは仲瀬志保美さん、大原由香子さん、三浦（旧姓：柴田）伊都子さん達と数名の学生でした。最終的なまとめは5月頃までかかり資料を提出し、私の方では旧角川邸蔵書資料の活用案について意見書を添えました。

大学院

文学研究科に新設された臨床人間学専攻、臨床社会学専修の臨床教育学特論科目を資格課程の教員も担当することになりました。これを機に受講生の研究ノートや研究メモを『年報』に掲載しています。三浦伊都子さんは「障害のある子どもと読書」という力作を書いています。またNo.8には太田真我君が修士論文のため実施したアンケート調査（学校図書館についての意識調査）の分析結果をまとめてくれました。ふたりとも2008年度から東京都立高等学校の教師として働いています。

2006年度

司書教諭課程

履修開始年次を従来の3年次から2年次に変更しました。これも受講終了を3年次にし、で

できれば司書教諭科目で学んだことを教育実習において、考える機会として欲しいという願いもあっての変更です。

TA制度活用

齋藤先生がTA採用の申請書を書いてくださった結果、採用が認められることになりました。開室時間も長くなり、進路相談なども学生にとって身近な先輩にできるということでよい結果をうんでいます。TAにとっても教育現場の表に出てこない仕事や実務の経験がいずれ役に立つことになることと確信しています。

e-ラーニングコンテンツ作成

夏休み前頃から、コンテンツ作成を始めました。これは大学全体で遠隔教育に取り組むという動きの中から生まれたのですが、課程としてもゆくゆくは現職者教育として、学外に発信していきたいという考えもありました。

作成に当たっては情報センター長であった阪井和男先生(法学部)にいろいろと助言をいただきました。また、当時和泉システム課におられた宮原俊之氏(現財務・資産管理部 資産管理課システム管理グループ)が実務面での担当で、自身もe-ラーニング(遠隔教育)を研究中とあって、ノウハウを伺うなど大変お世話になりました。

映像資料教材作成

著作権の関係から、配信する映像教材に関しては、新しく作成することにしました。図書館サービスを皮切りに、図書館所蔵資料(西洋)、新築なった調布の明治大学付属明治高等学校中学校図書館、横浜市立盲特別支援学校図書館そして児童図書館関係などの映像資料作成を企画し、大学から業者(学研)に委託しました。

図書館サービス論用映像教材(DVD)は、当初は課程設置大学や科目担当者の希望があれば実費で販売をすることを目論んでいました。が、その後司書課程設置大学及び都道府県立と政令指定都市立図書館に無償で提供するという運びとなりました。著作権の関係から個人ではなく大学や図書館への提供です。

これには針ヶ谷副学長と市川好和常勤理事のご理解とご支援があり、また教学企画部新学部

等設置準備グループ及び資格課程グループの職員の方々のご協力によるものです。

2000年以降図書館のサービス現場を取材した教材がほとんどなく、さらには今日新しいサービスがいくつかの図書館で展開されている状況なので、このDVDの無償提供は司書課程担当の教員からそしてまた多くの図書館から図書館サービスを知る機会として、広報の機会として期待されています。

このことも明治大学が司書の養成に関して、他大学との共生も念頭において考えてくださっていることの表われだと受け止めています。そして大学当局、理事会のご理解とご支援に篤く感謝しております。

図書館所蔵資料の撮影は、貴重書室の改装も重なり図書館には多大なご面倒をおかけしました。当時の図書館事務部 総合サービス課 課長の浮塚利夫氏(現学術・社会連携部社会連携事務長)と鈴木秀子司書のご支援を得、2007年11月より撮影を開始し1月までのほぼ3カ月に亘りましたが、無事収録することが出来ました。

ボランティア

以前からお話のあった千代田区立神田一ツ橋中学校のボランティア活動を開始し、今日まで続いています。卒業する学生と交代しながら、資料整理を中心に取り組み、成果も表れて、神田一ツ橋中学校から喜ばれています。学生にとっても現場で仕事をさせていただき、成長する機会となりました。

教員養成GP

質の高い教員養成プログラム、明治大学では教職課程の「授業デザイン力形成支援プロジェクト」が採用され、司書教諭課程も2006年から2年にわたり参画しました。

過去10年にわたり専任の学校司書を配置している白山市の小・中学校や先進的なプログラムを打ち出している市川市教育センターなどを見学訪問し、その成果を報告集として発行し、訪問先にも送りました。

またシンポジウムの折には分科会を設け、学校図書館の教育過程における意義、役割などを

考える機会を提供しました。

2007年度

増員

後期から新たに1名の増員が認められ、三浦太郎専任講師を迎え、3名の体制となりました。今後、司書・司書教諭課程が将来に向けて更なる飛躍を遂げねばならないと真摯に受け止めます。

とりあえずはe-ラーニングを推進する際の強力な担い手の一人として三浦太郎先生が精力的にコンテンツ作成に加わっていただきました。新任早々、多種の科目の作成はさぞかし大変であったろうと思われます。

この3名体制が実現したのも納谷学長をはじめ坂本恒夫副学長（当時一部教務部長）、吉村武彦大学院長（当時文学部長）、林義勝文学部長そして当時の岩井憲幸教養課程主任、矢島國雄五課程主任（現教養課程主任）など多くの先生方のご支援の賜物であったと深く感謝しております。

メディア授業

後期から生田地区の学生を念頭にe-ラーニングを開始しました。学内ではメディア授業と称し、対面授業と区別しています。2008年度からは和泉キャンパスに開講しました。

受講生からは好評を得ており、理由として、何度でも繰り返し見て学習することができる、専門の科目と授業が重なった際に受講が可能である、クラブ活動と両立できる、遠隔地から通学しているので助かる、などの声が挙げられています。

司書講習とメディア授業

後期から齋藤先生が司書課程ならびに五課程主任に就任されました。齋藤先生の新たなとりくみにより、かねてよりの念願であった司書講習におけるe-ラーニングもようやく実現できそうです。原案作成等齋藤先生と三浦先生の準備は並々ならぬものです。そしてこの件の実現もリバティ・アカデミー長である学長ならびに吉田悦治副学長、米山学務理事、伊藤光教務部長のご理解とご支援によるものだと思っております。

加えて司書講習開設当時から実務を担当し協

力してくださったりバティ・アカデミー事務局のスタッフの存在も欠かせません。事務長として図書館から異動された浮塚氏の存在も心強く、また講習開設当初からなにかとお世話をくださった杉浦哲也氏（学術社会連携部 社会連携事務室）に加えて、異動してこられた山崎由香子さん達のご協力も欠くことができません。

おわりに

授業で学生に必ず紹介したユネスコ公共図書館宣言（司書教諭課程では同じ理念を継承しているユネスコ学校図書館宣言）を引用します。

公共図書館のサービスは、年齢、人種、性別、宗教、国籍、言語あるいは社会的身分を問わず、すべての人が平等に利用できるという原則に基づいて提供される。（Unesco Public Library Manifesto 1994年採択／『図書館雑誌』89(4) 1995. 4. p. 254-255）

学校図書館も含め図書館のサービスは、全ての人に開かれていることが理念のひとつです。

生涯を通じてマイノリティの方々へのまなざしと「共生」ということを考えて欲しいという願いの下にこの宣言を毎年学生に伝えてきました。共に生きる社会そして平和な社会でなければ、図書館サービスはすべての人に提供できません。このことを生涯を通じて考えて欲しいというのが私の願いでした。

現在、日本の図書館界は多くの問題を抱えています。なかでも専門職養成は、今後の図書館の道を左右する課題と言えるでしょう。明治大学の司書・司書教諭課程はどのような道を歩むのか、次の世代に期待しています。

9年間の歩みを辿るにはあまりに多くの出来事と様々な出会いがありました。ご支援をいただいた方々のお名前をすべて挙げることはできませんでしたが、資格課程グループや文学部グループのスタッフの方々その他多くの教職員の皆様のご支援とご協力があってこそこの9年間でした。

多くの出会いを想い起こしつつ、次なる歩みを担ってくださる司書・司書教諭課程が誇る三傑にバトンをお渡ししたいと思います。

春の日に 感謝とともに。